

一時がやがやとやかましかった生徒たちはみんな教場にはいつて、きゆうにしんとするほどあたりがしずかになりました。ぼくはさびしくってさびしくってしようがないほど悲しくなりました。あのくらいすきな先生を苦しめたかと思うとぼくはほんとうにわるいことをしてしまったと思いました。ぶどうなどはとてもたべる気になれないで、いつまでもないていました。

ふとぼくはかたをかろくゆすぶられて目をさました。ぼくは先生の部屋でいつのまにかなき寝入りをしていたとみえます。少しやせて身長の高い先生は笑顔を見せてぼくを見おろしていられました。ぼくはねむったために気分がよくなっていままであったことはわすれてしまって、少しはずかしそうにわらいかえしながら、あわててひざの上からすべり落ちそうになっていたぶどうのふさをつまみ上げましたが、すぐに悲しいことを思いだしてわらいもなにもひっこんでしまいました。

「そんなにかなし顔をしなくてもよろしい。もうみんなは帰ってしまいましたから、あなたはお帰りなさい。そしてあすはどんなことがあっても学校に來なければいけませんよ。あなたの顔を見ないとわたくしはかなく思いますよ。きつとですよ。」

そういつて先生はぼくのカバンの中にそつとぶどうのふさを入れてくださいました。ぼくはいつものように海岸通りを、海をながめたり船をながめたりしながらつまらなく家に帰りました。そし

てぶどうをおいしくたべてしまいました。

けれどもつぎの日がくるとぼくはなかなか学校に行く気にはなれませんでした。お腹がいたくなればいいと思ったり、頭痛がすればいいと思ったりしたけれども、その日にかぎって虫歯一本いたみもしないのです。しかたなしにいやいやながら家は出ましたが、ぶらぶらと考えながら歩きました。どうしても学校の門をはいることができないように思われたのです。けれども先生の別れのことばを思い出すと、ぼくは先生の顔だけはなんと見たくてしかたがありませんでした。ぼくが行かなかつたら、先生はきつとかなしく思われるにちがいない。もう一度先生のやさしい目で見られたい。ただその一事があるばかりでぼくは学校の門をくぐりました。

そうしたらどうでしょう、まず第一にまちきつていたようにジムがとんできて、ぼくの手をにぎってくれました。そしてきのうのことなんかわすれてしまったように、親切にぼくの手をひいてどきまぎしているぼくを先生の部屋につれて行くのです。ぼくはなんだかわけがわかりませんでした。学校にいったらみんなが遠くの方からぼくを見て、

「見ろ、どろぼうのうそつきの日本人がきた。」

とでも、わる口をいうだろうと思っていたのにこんなふうになれると気味がわるいほどでした。

ふたりの足音をききつけてか、先生はジムがノックしない前に、戸をあけてくださいました。ふたりは部屋の中にはいりました。